

ば。此人を頼むべしと云へば。皆々是に同じなる家老下間安藝を大
 將として。享録二年五月廿五日。富樫介政親の高尾の城へ。國中の
 百姓共一命を塵埃の如くにして。短兵を以て急に一度に押寄せたれ
 ば。左しも武勇の富樫介政親。心はやたけにはやれども。思ひも寄
 らぬ急なことなり。討ちても切りても三十萬人盡さばこそ。亂國の
 砌なれば。斯様に隣國の騒動ありても喜びこそすれ。外より救ふこ
 ともなく。情なや五月廿九日より六月三日の夜まで。五日の間に遂
 に高尾は落城に及び。時なるかな。左しも武勇の富樫介政親は一家
 中諸共一揆の爲に城を枕に討死されたり。扱百姓共心を合せ。此度
 下間殿なくばよも本意は遂けおうせまひ。左あれば法眼殿は姓は源
 氏の大將。三位頼政の後胤。下間蓮位の末孫。固より本願寺累代の
 補相。官位は法眼なれば氏と云ひ國主として何の不足かあらんとて

忽ち法眼を以て加賀の國主とせられたり。是に依て安藝は昨日まで
 は浪人の難儀。今日は時を得て一ヶ國の主となり。仁を以て國を治
 め。漸々百姓共徳を慕ひ。威を輝かし。權を振ひ。遂に能登。越中も討ち
 ち從へ。三ヶ國を掌に握り。加賀。能登。越中も討ち從へ。合せて百七十
 萬石を領し。榮華の春を浮べられし



となり。

第三十 蓮如上人御病床御物語の事

叔蓮如上人大阪御堂御建立よりは。大方大阪に御座を占めさせられ
 こと見ゆて。攝洲東成郡生玉の庄内。大阪といふ在所は往古よりい
 かなる約束のありけるにや。さんぬる明應第五の秋下旬のころより
 かりそめながらこの在所をみそめしより。すでにかたのごとく一字
 の坊舎を建立せしめ。當年ははやすでに三年の星霜をへたりき」と
 仰せられてある。「愚老當年の夏ころより違例せしめて。いまにを
 いて本腹のすがたこれなし。つるには當年寒中にはかならず。往生
 の本懐をとぐべき條。一定とおもひはんべり」とありて。明應第七の
 年。御歳八十四歳四月より御不例に在せしが。打臥して御座る程の
 こともなかりしが。霜月頃より餘程御不快なりしか「當年寒中には

かならず往生の本懐をとぐべき條。一定とおもひはんべり」と仰せ
 られて。もう寒中には往生するであらふと仰せらるゝ位の御病氣で
 ありしに。遂に其年も暮れて明應八年。御歳八十五歳。蓮師は大阪
 にて御往生の思召にてありしに。山科より實如上人御迎ひに御出で
 遊ばし。二月中旬大阪を御立ちなされ。出口の御堂にて一夜御止宿
 なされ。翌日山科へ御入りなされて。先づ御眞影様へしみくゝと御
 禮をなされ。私大阪にて命終致じなは御尊容を拜し奉らずと存せ
 しが。一度御尊顔に謁したく参り候なりとて。涙と共に御禮を遂げ
 させられ。夫より御病床へ御入りなされたり。爾るに三月朔日のこ
 となるが。吾往生も程近し。御眞影へ御暇乞致したとて。御弟子
 方相集り。手輿に乗せ奉り。御堂へ連れ参りたれば。暫く御眞影へ
 御暇乞の御禮を遂げさせられて御子達。御弟子方に向はせられ。久

しく山科の境内を見ぬ今暇乞に見んと思ふ。御堂の椽へ連れて行き
て呉れよと仰せらるゝ。夫より椽へ御輿を下し奉れば。境内の様子
を御覽下て。是が見納めなりと。折節御庭に吉野櫻見事に今を盛に
咲き亂れてありしが其花を御覽なされ。

咲きつゞく花みる度になほもまた

いとねがはじき西の彼岸

形見には六字の御名を残りをく

なからん跡はたれも稱へよ

なき跡に我をわすれぬものあらは

たゞ彌陀たのむ心おこせよ

と二首の御歌を御口吟みなされた。乃で御連枝方御弟子達が其御歌
の意を尋ねさせられたら。初の一首は人間の翫ぶ花でさへ美しひの

に。況して況んや法藏願力より顯はれたる極樂浄土の七寶樹林の花
盛りは。何様に美しひことであらふかと。極樂浄土を思ひ續けて詠
トたぞよと仰せらるゝ。併し次の二首は花の心は御座りませぬと申
し上げたれば。あればよ初は花を見て。愈浄土の莊嚴を思ひ回ら
て詠めたれども。只心に残るは滅後の同行我居る間は随分法義に油
断なき様に相續すれども。我往生の後には法義も失へやうか安心に
間違ひも出来やうかと夫ばかりが案下らるゝ。夫ゆへ初めの一首は
花のこと思ふて詠たれども。二首目からは花のことは打忘れ心に
掛る同行のことを思はず詠トたぞと仰せられたれば。御弟子方も。
難有く涙に咽び。夫程に思召す御慈悲の御念力を。末世の同行が承
はりましたなら。無喜びまするで御座りませふと皆々衣の袖を絞ら
せられしとなり。扱夫より御寢所へ御入りなされて只御寐みなされ

て御座ることなれば。嚙や御退屈にあらふと思ふて。空善房が御慰
 みに善く轉る鶯を差上げたれば。上人三日御枕元に置ひて御聞きな
 された中々蓮師は小鳥を籠に御入れなされて御喜びなさるゝ様なこ
 とはなけれども。鶯が法を聞けくと鳴くを御聞きなされて。鳥で
 さへ法を聞けくと勸むるに。人間と生れて法を聞かぬは。扱々淺
 間敷や。佛願他力の法は聞かぬはならぬと御教化なされしが。三日
 目に空善に法を聞けと鳴くと思はず三日の間。牢入れさして置ひた
 嚙々窮屈にありたをあらふ。藪の内へ放してやれよと仰せられた故
 空善御枕元にて籠の戸を開きたれば。籠の内より飛び出して。洪々
 としたる藪の中で。彼方此方と飛び回り。嬉しそりに轉る有様を御
 覽なされては。はらくと涙に咽はせられ。あれ見よ鶯が窮屈な籠
 から廣ひ處へ出て。嬉しそりに轉る。丁度我々の身の上が彼通り。

今までは三界生死の籠の内。
 悪業に捕へられ。出ることの
 ならざりしに。難有や。此度
 は阿彌陀如來の御慈悲にて。
 此三界の牢を出で「究竟如虛
 空。廣大無邊際」の洪々とど
 たる御浄土へ參り。三明六通
 無尊自在。光り輝く身となり
 て。佛の國々へ供養に回らふ
 と。還相回向に出掛けやうと
 自由自在の身の上となるは。
 嚙や嬉しひことであらふ。丁



度今の驚が喜んで。飛び歩く如くであらふと御喜びなされたれば。皆々悲喜の涙に咽び合へり。又日頃御寵愛ありし。栗毛の馬を御覽なされたき由仰せられたれば。御寢殿の際まで引寄せて御覽に入れ申せば。此馬前足を延べて涙を流し頭を低れて尾も振らず。稍暫時して空善房は。實に畜類なれども上人を見奉りて涙を流す。その様こそ如何にも心ありけに不思議なる振舞なりとて。悲歎の涙に咽はれたり。

第三十一 下間安藝の法眼勘當御免の事

扱先達てより御勘當を蒙りたる下間安藝の法眼は加賀。能登。越中三ヶ國を掌に握り。榮花を極むると雖も。二十餘年の昔蓮師の命に背き。七生の勘當を仰付けられ。主従の縁を切り玉へば。法眼は深く此ことを歎き玉ひ。我この勘當を御赦免に預らされば。先祖蓮位

房の今世後世の二世の重恩を受け奉りし御開山の御子孫へ。奉公し奉れと堅く遺言をせられしにも背き。この後の子孫には仕へ奉ることども叶ふまと思へば。榮花も頼しからず。唯明けても暮れても歎くは此ことなり。日夜に悔むは先達ての過りなれば。平生手筋を求めて御赦免の御詫言のみに心を碎さしが。蓮師御前近く常隨昵近せらるゝ。御弟子の内に慶聞と云ふ人あり。これ法眼多年人懇せられし故。此ことを申し上げられしなれども。上人曾て御承引あらせられぬ。剩へ云ひ顯す時は大に咎め玉ひ。必ず法眼のこと云ひ出すべからず。強て云ふものは。其ものどもに勘當致すと仰せ出さるれば。慶聞房。今は力及ばず。この旨を北國へ申し下されたれば。法眼今は力も勢も切れ果てし。悲しまるゝ其上風の便に聞きければ。蓮師も御病氣にて程近く御往生在すと人々申せば。法眼は今は北國に居

るにも居られず。雪の中を臥はすして。蓮師勘當御赦免なき時は。子孫永々本願寺へ歸參叶ふべからず。爾れば今の榮花は夢の戯れ未
 來こそ一大事。善知識の御意に見放された身は。祖師の御跡を慕ふ
 ことは叶ふべからず。左あれば七生は愚か。未來永々の御勘當を蒙
 りし我身の上。人傳に御託申す處ではなひ。上人も最早御病氣のこ
 となれば必ず御往生も程近しと聞くより。法眼態々山科へ參り。己
 前の知己朋友の人もなひかと御堂の白砂で彼方此方に立ち求むる折
 節。かの慶聞に行き合ひ。法眼大に喜び。豫々御託願ひの御取次に
 預りし一禮を述べ尙亦只管御赦免の願ひを御取次下され候様にと願
 ひければ。慶聞眉をひそめて。我も何卒と思ひ。是までも度々御機
 嫌を伺ひ願ふたれども。御聞入れなく。剩へこの已後申し出すもの
 とともに勘當と殿しき御口止め逢ふたれば。何分最早云ひ出すこと

も叶ひ難く。氣の毒千萬には思へども。力及ばず。思ひ諦め玉へと
 云ふに付。法眼は五体に徹し。五臟六腑も裂け破れるばかりに。兎
 角の言もなかりけり。慶聞是を見て哀れに思ひ。迎も御赦免はある
 まひけれども。せめては蔭からなりとも御姿を拜まれよと忍ばせ置
 き。慶聞は御殿へ行かれしが。爾るに不思議なるかな。蓮如上人重
 き枕を上げさせられ。如何に慶聞安藝法眼は來らざるやと仰せらる
 り。慶聞思ひの外の御言に。はつと驚き。こは珍らしき御尋ね先達
 て度々法眼御勘當の御託申し上げたれば。殿しく御止め遊ばし。此
 後申し出すものごもに勘當と仰せ出されしに。只今上人の御尋ね如
 何なる思召に在すやと御不審申し上げたれば上人仰せらるゝに成程
 汝が不審尤もなり。去ながら如來聖人の御慈悲は善人より惡人に猶
 厚し。法眼如きの不忠の罪人我は憎しと見捨てし見捨て玉はぬ儂

祖の大慈悲。必ず極樂へ迎へ取り玉ふべし。共に聖人の化導に依て西方極樂へ往生すれば。争か極樂には隔てあるべき。豫てより左に思ひしかども。是までつれなふ云ひしは。法眼に先非を思ひ知らせん爲に嚴しく誡めて居たれども。追付け往生すべし覺ゆれば。今法眼に勘當を許し與へたく思ふて尋ねしぞと仰せられければ。慶聞は承りて難有ひ善知識の御意。左すれば今まで御許しなされざるも御慈悲。今又許し玉ふも御慈悲なることの難有さよ。何をか隠し申すべき。法眼は御勘當御赦免の御願ひの爲に。最早御白砂まで忍び参り候と申し上ぐれば。上人も嬉し氣に笑ひ玉ひ急ぎ法眼を伴ひ來れどの玉ふ。慶聞大に喜び。走り出で右の御意を悉く法眼に語りければ。夢か幻か難有涙に咽びつゝ。急ぎ御禮申し上げたと慶聞房に誘はれ。御病床へ通り。死したる親に逢ふ如く。兎角の言も涙に

くれて出でされば。上人情法眼を御覽トて。法眼か懐かしや。此程は如何とつらんと思ひしに。善ふこそ思ひ上られしぞ。予も追付け往生すべし。勘當も是までなり。只今許す飯參すべし。必ず祖師在世の昔。蓮位房が仕へし如く。廣大の御恩を忘れず。子孫永々御眞影に忠義を勵み御給仕申し上ぐべしと。御赦免の御言身に餘りて難有く。先立つものは涙ばかり。法眼心の中に思ふ様。上人の御訖には假令身命を捨てしも叶ふ義ならば御訖申し奉らんと思ひしに只一言の御訖も申し上げず。御慈悲の上から御免の御意。御恩徳の程何を以てき報ト奉らんと。即座に彼加賀能登越中三ヶ國を御本山へ差上げ。永々本願寺の御寺領となして再び山科へ歸參せられ。夫より代々御領地となりたりと云ふ。

第三十二 蓮如上人御往生の事

扱夫より蓮如上人次第に御病氣重らせられ。廿三日の日より御膳も食上らず。只御念佛のみでなりしに。五つ時には御目を閉ぢさせられて。脈も上り玉ひ。人々御往生かと悲しむ騒ぎけるが。その日の八ツ時より又御脈出でさせられたるこそ不思議なれ。爾るに己に廿五日御往生の日になれば不思議や朝日出る頃。天地鳴動して日輪の回ること類なし。これ權化の入滅の前兆にしてならんと皆々別れを惜みて。或は悲歎し或は奇異の思ひをなせり。爾るに上人。御子様達。御弟子方に向ひ。我もはや娑婆の因縁盡きて今日午の刻に往生の素懷を遂ぐるもう一度御眞影様へ御暇乞申し上げたと仰せらるゝ故に。御弟子方換るゝ手輿を昇き居へたれば。上人慶聞を御召しなされ。其方に豫て預け置きたる封印の葛籠。是へ持參せよとの御意。依て慶聞畏りましたと。葛籠を御前へ持つて來ると。上人御

封印を解けよとの玉ふ。はつと申して何ならんと蓋押明けて見れば木綿の綿入に在家禪門の着る十徳なり。是は何で御座りますと申し上ぐれば。蓮如が死装束預て拵へ置ひた。さあ夫を着せ替へ玉はれとの玉ふ。依て御弟子方。是はあまり荒々しきもので御座りますと申し上ぐれば。否々夫が蓮如に相應。早々着せ替へてくれよと仰せらるゝ。乃で御白無垢を脱がせまして。木綿の麤服を着せまして。十徳を御召しなされて。是々蓮如に善ふ似合ふた。いざこの姿で御暇乞申さふとて。御輿に召せば。慶聞。法敬。空善並に丹後の法眼どが御輿を昇ひて。御堂へ連れまして參り。内陣へ昇き上げやうと致したれば。否々下陣から御暇乞。否々夫でも御内陣へと申し上ぐれば。否々今は何にも知らぬ愚痴な在家の禪門ぢやで。在家の禪門が何様して内陣へ上られふ。矢張下陣くゝとの玉ふ故。下に下しまじ

たれば。下陣の敷居に手を掛け玉ひ。御涙と共に御眞影様を打守り。今日が實に御暇乞八十年の間。商買もなくして暖に着。浴く食し安穩に暮しましたは。皆彼尊様の御養育最早今日は娑婆の因縁盡き。目出度往生の素懷を遂げます。追付け浄土に於て直々に御禮を申し上げます。是までは利根よ知識よ。蓮如よと敬はれましたるが。今は何にも知



蓮如上
入浄土
生の尊

らぬ愚痴の在家の禪門の姿で御暇乞。是が聖人の御意にも相叶ひませふと。

なか／＼につみある身こそ嬉しけれ

さらすはいかで彌陀をたのみむ

と詠下玉ひ。稍暫時の間涙ながら。御暇乞遊ばして。夫より御病床へ御入りなされしが。人々に向はせられ。親となり子となり。兄弟となるは。多生の深き契なるぞ。能く／＼の因縁なる程に。最早其方達への對面は今日限り。追付け浄土に再會を期せん。我なき跡に於ても。兄弟随分中善く致せ。信心たにあれば中の惡きことはなひものぞ。又々此上は我に代り随分法義を相續し。法義益盛にして。一人なりとも浄土参りの出来るのが聖人への御奉公。此義ばかりは吳々頼み置く程に。又何ぞ聞きたまきことはなひか。不審のことがあ

るならば。今の間に問へよ。最早只今が暇乞なりと仰せらるゝ。實
 如上人を始めとして。實悟。蓮淳。蓮誓。兼縁様。御弟子方には。
 慶聞房。法敬房。空善房。丹後の法橋等。今が御別れかと前後不覺
 に泣き入り玉へば。蓮師の仰せらるゝには。定れる命なれば仕方は
 なひが。斯様に面り逢ふたるものは。又諦めも付かふなれども。已
 が死んだ後で。遙々と上りて來た同行が嘸殘念に思ふであらふ。依
 て我死骸を曲録に乗せて御堂に出し飾りて置ひて。せめては我死骸
 になりとも對面さすれば同行も満足するであらふ。又我姿を見て信
 を取る人もあらんと仰せられ。夫より慶聞に向ひ玉ひ。何を難有ひ
 ものを讀んで聞かせと仰せられたれば。慶聞其邊を見れば。幸ひ御
 卓の上にて末代無智の御文がある。是を讀みませふと申せば。おゝ其
 末代無智の御文は難有ひ。讀んで玉はれと。其時御自身に御書さな

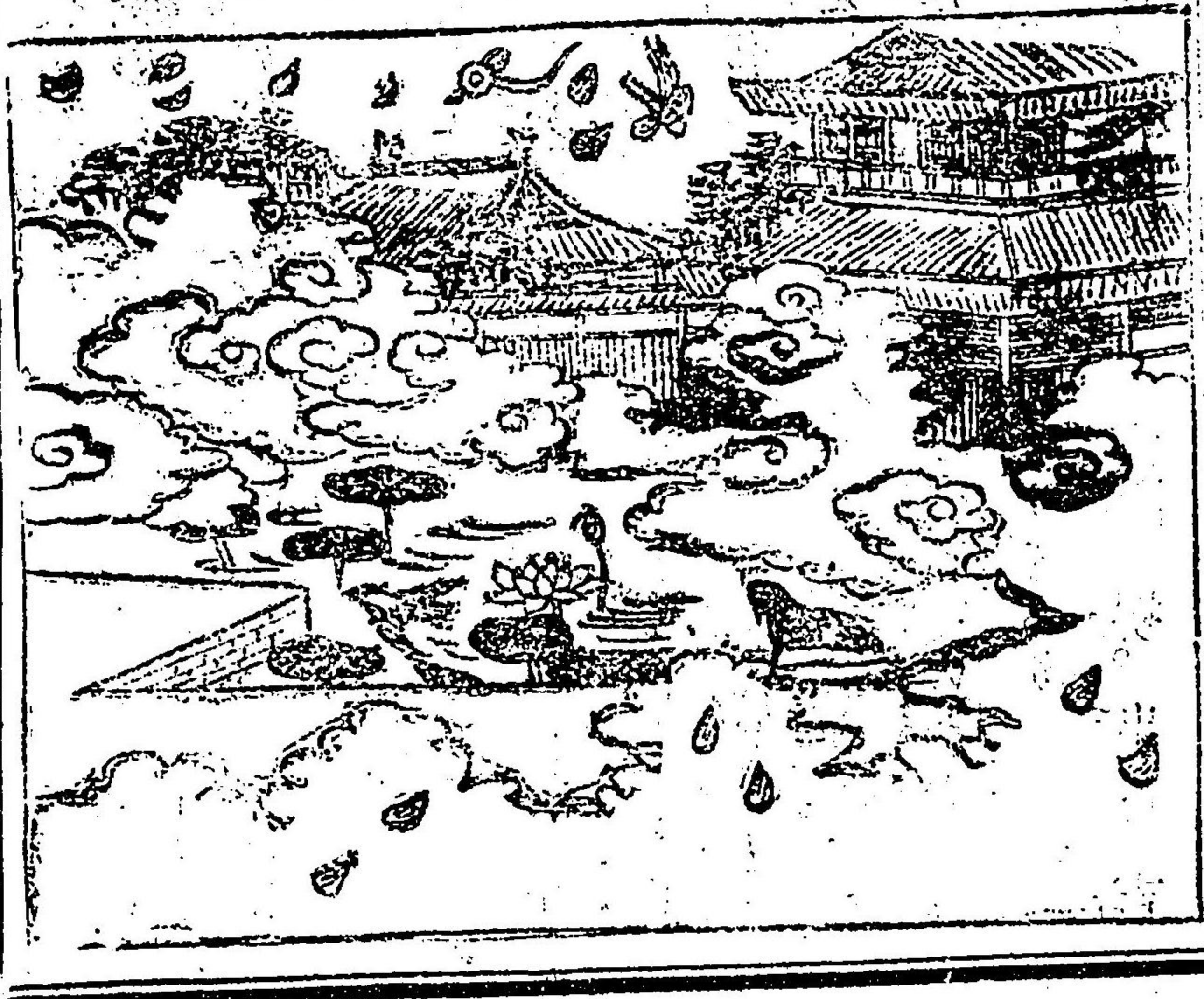
された御文なれども。御の字を付けて御文と仰せられた。是は豫て
 御文は彌陀の直説なりと仰せられた。依て慶聞押擴げて。末代無智
 の御文を讀み終れば。涙に咽び玉ひて。扱々難有ひ。もう一度讀め
 と又讀上げる。己上四返まで御聞きなされしが。遂にその日の正午
 に。頭北面西右脇に臥し玉ひ。眠るが如くにして念佛の息絶は在
 けり。時に御年八十五歳。御体柔輭にして御相好常の如くに變らせ
 玉はず。悲哉日月西雲に隠れ法燈忽ち消ゆぬと。御連枝を始め御弟
 子方は申すも愚か道俗男女群集し。歎き悲むこと限りなし。扱御葬
 送の儀は。御遺言に任せ翌廿六日に御決定在し。餘り俄の事なれど
 も。大阪より道具は何れも御用意ありて所持し玉へば。用意造作と
 云ふことは少しもなし。去程に廿五日夜深けて廿六日の曉御沐浴さ
 せまして。實如上人御調聲にて御勤めありたれば。皆々御名殘を惜

み奉ること限りなし。然るに又御遺言により。廿六日朝常の御装立にて御衣袈裟を召させ。木の珠敷を掛け御杖をつかせまして。曲録に乗せ奉り。御眞影の脇に居り置き奉るに。平生の御容貌は一向各別に在せざる。今日は御顔色も眞黒に御なりなされてとんと御眞影の御容貌と變らせられず。何れが御眞影やら取違へる位に御面容が能く似させられ。斯の如く御開山と一体の御容貌にならせられたるごと。誠に祖師聖人の御再誕にて在すと云ふこと今明に知られて。人々拜み奉り。各涙を流し轉び倒れ重なりて歎き悲む有様。見るに氣を失ふばかりなり。扱其後御歸りなされ。遂に御支度調はせられ辰の刻に慶聞房が導師となりて御葬送遊ばされ。供奉の御蓮枝方御弟子達其他數萬の道俗群集をなし。路念佛の聲一入哀れに。老若貴賤悲歎の涙に咽はれしが遂に時移りて午の刻に御火葬遊ばされたり

第三十三 蓮如上人滅後御靈瑞の事

扱三月二十六日の辰の刻に御葬送の場に送り玉ふに。日光萬山に輝き紫雲四方に翳さ。殊に西の空に當り。金色の光明雲の上に重なり又諸佛菩薩の音樂聞ゆ。奇麗なる妙華雨り降る。人々斯る不思議の靈瑞を面たり。見奉り。敬ひ尊むこと限りなし。我宗は申すに及ばず他宗の門徒に至るまでも。是を見聞し奉り益崇敬の思ひをなせり斯様に一片の烟となし奉るに。烟の中に白鷺一面に飛び回り。又白龍現はれて暫く烟を去らず。是併しながら愁傷の心ならんと皆人申し合へり。又その烟肉身の香更になく。馨香芬々と香ひ恰も沈香を薫べるが如く又空華と云ふて摩訶曼陀羅華等の四色百寶の花が。はらくくと雪の如くに雨り降る。其花の周圍一尺餘りもありと云ふ。斯くの如く山科ばかりではなひ。御建立の御坊大阪。堺。出口。吉

崎。何れも御入滅の日は空華
 雨り降りしと云ふ。殊に山科
 大阪。兩所共に一七日間空華
 も紫雲も止まざりしとなり。
 又蓮師手づから植はさせ玉へ
 る。諸樹の花葉悉く萎めりと
 斯の如く草木非情の類までも
 彼御入滅を悲歎せるものによ
 恰も釋尊御入滅の時に違はず
 實に靈瑞不思議のことどもな
 り。これ權化の方便未代の衆
 生に知らしめ玉ふなり。仰ぐ



べし。又泉涌寺の長老申されけるは。蓮如上人は祖師聖人の御再誕
 にて在すをあらたに靈告を蒙りし由を。或人より聞きて奇特に思
 ひし程に。今度かの御茶毘の時に及んで。この寺の後の嶺に僧達十
 餘人と共に登り。遙にかの葬喪を拜みたるに。烟の中に白竜二頭現
 はれ。紫雲靄き。空華雨りたればこれ凡事ならずと覺て驚歎措く
 能はざりし。實に斯の如くの不思議は耳には聞けども眼には見す。
 年己に七十になりたれども。此度始めて斯る奇瑞を拜みたりと物語
 せられたり。彼寺の長老は然るべき聞ある人にてありしに。殊の
 外蓮師の御高德を尊び申されしとなり。翌廿七日遺骨を拾ひて。同
 日より四月十七日まで御忌日を約めさせられ念佛勤行を勵し玉ふ。
 本式に任せて七日日間御中陰を致させらるる筈の處。追薦供養を本
 とせずたゝ一念歸命の信心を御本意に思召し。御存生の時にたゝ三

七日ばかりその營みをなすべしと仰せ置かれし旨に任せ玉へり。去程に遠近の道俗報恩の誠を致し。懇志を抽んずる人々その數を知らず。常隨昵近の御弟子方は更なり平生教を受けし所化達は謝徳を專にして御遺訓を守り歩みを運び玉ふ。爾るに御遷化の砌より一七日間。紫雲空中に覆ひ。又二七日には本堂御影堂の上に空華一面に雨り降り。參詣の人々は是を拜し奉りて。隨喜の涙を流し仰ぎ尊むこと限りなかりし。又大阪御堂の邊にも。同く一七日の間紫雲驟き。二尺ばかりなる空華雨り降る。是を拜する輩瞻仰せざるはなく。誠に奇代不思議のことなり。上は公家攝家を始めとし。下は田夫野叟に至るまで。讚譽せざるものなかりしと云ふ。

第三十四 蓮如上人滅後御遺徳の事

明應九年先師上人の一周忌を迎へさせられ。念佛勤行の誠を致し偏

に報謝の懇念を運はせらる。その御遺徳の熾なること頗る在世の古に過ぎたり。遺訓を重ずる門葉在々所々に遍布し法義益繁盛せり。然るに此一周忌に當りて。又空華雨り降ること例の如く處々に及びり。其後年忌を迎ふる毎に是の如きの靈瑞度々ありしと云ふ傳以ふれば先師上人我國に御誕生あらせられ。一時中絶したる眞宗を再興し玉ひ衆生化益に心を碎かせられ。日本國中津々浦々に至るまで。此難有き御法を弘め玉ひ。尙滅後に於ても利益を末世に顯はさんとて。明應八年三月御遷化あらせられ面たり奇瑞を見せしめ玉ひ。滅後に至りてその御遺徳多き中二三を示し奉るに。或る門葉の中の道場を焼失したるに。或は名號の燒焦け玉ふが。多くの佛像となり玉へるもあり。或は名號の燒爛れさせ玉ふが。その字形ばかり明に残り玉へるもあり。或は名號の燃破れ玉ふが。漸々に癒へ返るもあり

御入滅後十ヶ年過ぎて或門葉の中御染筆を安置し奉るに。常に御燈明を掲げ奉らざるに御名號の邊耀き玉ふことあり。驚ひて是を拜し奉るに。光耀鮮にして阿彌陀佛の四字の上に忽ち方便法身の尊形現れ玉へるもあり。是の如く拜する間に。南無の二字の通に祖師聖人の尊形ありくと現れ玉ひ。其後又先師上人の御容貌現れ玉ふ。居所へ年數を重ね玉へども。彌その形明にして佛像數多現ト玉へり。古往今來此の如き奇特あるべからず。實にこれ滅後の利益を未代に知らしめんとすの善巧方便の不思議ならんか。凡そ上人在世滅後の靈瑞これ多しと雖も。一々述るに遑あらず。今は畧して是を記し奉りぬ

繪入 蓮如上人御實傳記終

明治三十年十二月八日印刷
 全 年 全 月 十五日發行

兵庫縣平民

編纂者 佐々木量俊

兵庫縣揖保郡半田村拾四番戶

京都府平民

發行者 松田甚左衛門

京都市油小路通花屋町上ル
 西若松町十七番戶

京都府士族

印刷者 井出時秀

京都市西六條木津屋橋通
 堀川東エ入三拾四番戶



版權
 所有

發行所

京都油小路通
 花屋町上ル

顯道書院

利井明朗師題字 受念寺多田行映師述

●聖人一流御文説教 實價廿四錢 郵稅四錢

此御文は金ケ森道西の乞ひに應じ御染筆を
らせられ殊に愚癡の我々の爲の五ヶの問答
を設け能く領解し易く御製作あらせられた
るものあり爾るに本書は斯る難有御文を讀
題として師が懇切に譬喩を交へ誰人にも領
解し易く辨述されたる者あれば以て信後相
續の助縁ともし自他幸福を得んことを望む
大行寺信曉淨心寺明傳師合著

●通佛敎百科全書 第二編 實價六十錢 郵稅十二錢

本綴全一冊 實價五十五錢 郵稅十錢
假綴全三冊 實價六十錢 郵稅十二錢
本書は大行寺述山海里淨心寺述百通切紙を
縮刷合本せし者にて種々の俗難に就て逐一
辨解せし書あれば演説或は説教には實に有
益ある材料あれども巻數多くして携帶に不
便あるのみあらざりて代價の不廉あるを以
て往々購讀の望を絶ち居らるゝ諸氏不尠依
て縮刷出版す
赤松連城師述

●四百回忌御待請御書法話 實價三錢 郵稅二錢

本書は御法會御待請心得方を辨述せし者也

利井老和上題歌 名和淵海師著

●修身佛敎德育談 實價十六錢 郵稅四錢

本書は舊鎌田今の名和淵海師が得意の達筆
を以て教育勸語の旨趣に基き撰述せられた
る平假名付繪入の而も美本の佛敎德育書に
して古今無比の珍書也一度此書を讀めば必
直し姑と嫁を和合せしめ家業を勉強せしむ
べき良書あり
小泉了歸師著 中山義樹氏序

●通佛敎修身談 實價二十錢 郵稅四錢

本書は佛敎の教義に依り我國固有の道徳を
擴張し且一家夫婦の和合より家事經濟子弟
の教育親子兄弟世間の交際生死婚禮の儀
等に至る凡て人倫五常の大本より終末に
苟も國家の隆盛に且平易に説示せられたれば
らんぞ欲する諸君早く此書に依り實行せら
れんことを希ふ
從一位勳一等公爵(石版摺)

●九條公佛前懸額 大形實價十錢 郵稅二錢 小形實價八錢 郵稅二錢

御親筆 發行所 京都油小路 花屋町上ル 顯道書院

安藝管瀬徹照師述

●上人御奇蹟説教 實價廿五錢 郵稅四錢

本書は逆師御一代の御化導に就て特に奇蹟
不思議を現はされたる御事蹟に就て席を十
有六に分ち如何なる婦女子と雖も解し易く
辨述されたる良書あり
筑紫大徳述 佐々木量俊師編

●本願成就文法話 實價十二錢 郵稅二錢

本書は澆季の今時曉天の星を望むが如く世
人に注目されたる徳義筑紫和上の先年彼
岸會の節本願成就文に就て通途の談録の如
く野鄙に流れ老華美に走らるる目今的事物に
就き適切なる譬喩を交へ實際應用的に法話
されたる者あれば愛法の緇素各位早く熟讀
翫味して其眞價を知り玉へ
佐々木量俊師編

●繪入蓮如上人御實傳記 實價廿五錢 郵稅四錢

從來蓮如上人の御傳記に就て數多出版あり
と雖も或は高尚に過るあり或は簡短にして
詳記せざるあり或は牽強附會の説を雜へた
るあり未だ正確にしてその中を得たるもの
せし然るに本書は解了し易くして高尚に失
せし付會に流れ老最も良書あり

但馬福成寺大仙師述

●報恩講式文説教 實價廿五錢 郵稅四錢

本書は滑稽と雄辯を以て其名を知られたる
福成寺大仙師が御式文に就て譬喩因縁を交
へ最も簡明に辯説されし者あれば苟も本宗
に流を汲むの緇素以て法味愛樂の助縁とあ
し玉はんことを乞ふ
筑紫大徳述 第二版

●聖人御正忌法話聞書 實價十六錢 郵稅四錢

右は先年筑紫和上が報恩講一週間に於て席
を甘席に分ち宗祖大師御出世の本懐は拔苦
與樂に外ならざるを説き本宗眞俗二諦の教
旨を明し御正忌法會營みの心得方等に至る
迄誰人にも解し易く譬喩因縁を交へ懇篤に
法話せられしものあれば本宗有縁の諸士早
く熟讀翫味し以て倍法義相續の助縁とせら
れんことを
雪廬家主人大嶋專念氏著

●佛敎少年活演説 實價六錢 郵稅二錢

本書は少年子弟をして忠孝を奨勵せしめん
が爲少年に成替り最も淺近に演述されし者
也
眞宗 一口さとし
實價 二五錢 郵稅 二錢

安藝菅瀬徹照師述

第二版

●上人御一代記説教 實價 廿五錢 郵税 六錢

本書は通師御一代御化導の事蹟又は一宗御再興の御苦勞の模様等を諸傳記の内より英を摘み華を拾ひ如何なる婦女子たりとも了解し易く辨述されたる良書あり本書は非常の高評を得て既に初版を賣盡せしを以て今般更に第二版を發行せり

●利井鮮妙師校・武田智順師編

●聖人御繪傳指説 實價 十八錢 郵税 二錢

本書は四幅の御繪を悉く差込み宗祖大師御一生の間御化導に就て御苦勞の有様を逐一指説せしものあれば本宗有縁の緇素乞ふ一讀あれ

●原真福寺説教集第一編 實價 六十錢 郵税 四錢

右は輕便を主として御裁斷御消息法話●真宗二諦相資辨●龍樹讚法話●横川法語辨述鈔の四冊を薄葉にて合冊せしものあり

●原真福寺説教集第二編 實價 六十錢 郵税 四錢

右は裁斷申明御消息説教●六字釋勸誘録●二河譬喻辨の三種を薄葉にて合冊せしものあり

椿原真福寺述 野世溪真了師閱

●布教譬喻因縁説教指南 全二冊 實價 廿六錢 郵税 四錢

從來譬喻因縁の書類續出すと雖も或は野郎に流れ或は華美に走り偶譬喻を辨述せりと雖も往々陳腐に屬し目下の情勢に適應せざるあり大に唱導家の遺憾とされし處幸に本書は有名なる説教家椿原了義師が得意の雄辨を以て懇篤に辨述されたる珍書也

●勸學實行院僧朗師講述司教香川葆晃師校閱

●上人御一代記聞書畧解 實價 九錢 郵税 二錢

本書の本文たるや通師御一生の間實行あらせられたる言行を記録せしものあれば言々句々一として吾々末徒の龜鑑あらざるはか

●法主親下の命を奉し講述されたる遺稿を以て司教葆晃師の訂正を経て出版せし者あり

●大内青樹居士校

●内地雜居目前に迫る佛教信徒心得 實價 二錢 郵税 一錢

内地雜居目前に迫る本書の閱讀燒眉の急也

安藝菅瀬徹照師述

●上人御奇蹟説教 實價 廿五錢 郵税 四錢

本書は通師御二代の御化導に就て特に奇瑞不思議を現はされたる御事蹟に就て席を十有六に分ち如何なる婦女子と雖も解し易く辨述されたる良書あり

●筑紫大徳述 佐々木量俊師編

●本願成就文法話 實價 十二錢 郵税 二錢

本書は澆季の今時曉天の星を望むが如く世人に注目されたる徳義家筑紫和上が先年彼岸會の節本願成就文に就て通途の談録の如く野鄙に流れを華美に走らせ目今の事物に就き適切なる譬喻を交へ實際の用的に法話にされたる者あれば愛法の緇素各位早く熟讀翫味して其眞價を知り玉へ

●佐々木量俊師編

●入蓮如上人御實傳記 實價 廿五錢 郵税 四錢

從來蓮如上人の御傳記に就て數多の版ありと雖も或は高尚に過るあり或は簡短にして詳記せざるあり或は牽強付會の説を雜へたるあり未だ正確にしてその中を得たるものせし然るに本書は解了し易くして高尚に失せ老付會に流れを最も良書あり

但馬福成寺大仙師述

●報恩講式文説教 實價 廿五錢 郵税 四錢

本書は滑稽と雄辯を以て其名を知られたる福成寺大仙師が御式文に就て譬喻因縁を交へ最も簡明に辨説されし者あれば苟も本宗に流を汲むの緇素以て法味愛樂の助縁とせし玉はんことを乞ふ

●筑紫大徳述 第二版

●聖人御正忌法話聞書 實價 十六錢 郵税 四錢

右は先年筑紫和上が報恩講一週間に於て席を甘席に分ち宗祖大師御出世の本懐は拔苦與樂に外ならざるをきき本宗眞俗二諦の教旨を明し御正忌法會管みの心得方等に在る迄誰人にも解し易く譬喻因縁を交へ懇篤に法話せられしものあれば本宗有縁の諸士早く熟讀翫味し以て倍法義相續の助縁とせられんことを

●雪廬家主人大嶋或念氏著

●佛敎少年活演説 實價 六錢 郵税 二錢

本書は少年子弟をして忠孝を奨励せしめんが爲少年に成替り最も淺近に演述されし者也

●眞宗一口さとし 實價 二五錢 郵税 二錢

安藝菅瀬徹照師述 第二版

上人御一代記説教 實價 廿五錢 郵税 六錢

本書は通師御一代御化導の事蹟又は一宗御再興の御苦勞の模様等を諸傳記の内より英を摘み華を拾ひ如何なる女子たりとも了解し易く辨述されたる良書あり本書は非常の高評を得て既に初版を賣盡せしを以て今般更に第二版を發行せり

利井鮮妙師校 武田智順師編

聖人御繪傳指説 實價 十八錢 郵税 二錢

本書は四幅の御指を悉く差披み宗祖大師御一生の間御化導に就て御苦勞の有様を逐一指説せしものあれば本宗有縁の緇素乞ふ一讀あれ

椿原真福寺説教集第一編 實價 六十錢 郵税 四錢

右は輕便を主として御裁斷御消息法話●眞宗二諦相資辨●龍樹讚法話●横川法語辨述鈔の四冊を薄葉にて合冊せしものあり

椿原真福寺説教集第二編 實價 六十錢 郵税 四錢

右は裁斷申明御消息説教●六字釋勸誘録●二河譬喻辨の三種を薄葉にて合冊せしものあり

椿原真福寺述 野世溪眞了師閱

布教譬喻因縁説教指南 全二冊 實價 廿六錢 郵税 四錢

從來譬喩因縁の書類續出すと雖も或は野鄙に流れ或は華美に走り偶譬喩を辨述せりと雖も大に唱導家の遺徳とされし幸に本書は有名ある説教家椿原了義師が得意の雄辨を以て懇篤に辨述されたる珍書也

上人御一代記開書畧解

本紙摺全五冊 實價 九十錢 郵税 十二錢

本書の本文たるや通師御一生の間實行あらせられたる言行を記録せしものあれば言々何々一として吾々未徒の龜鑑あらざるはあし然るに義理蘊奥にして趣く其深意を伺ふこと能はせ是に於て先年勸學僧朗師が悉く法主現下の命を奉し誦述されたる遺稿を以て司教葆晃師の訂正を経て出版せし者ありば苟も本宗に流を汲む者は座右に欠くべからざる寶典也

大内青巒居士校 内地雜居目前に迫る本書の閱讀燒眉の急也

司教赤松連城師述 附録本願寺勤王私志

御遺訓御消息畧解 實價 十錢 郵税 二錢

本書は信法院殿御臨末に際し末世の我々道俗の爲に形見として御遺し遊されたる御消息に基き師が逐一懇切に解釋されし者ありし以て御遺訓の深思を服膺せられんことを乞ふ

大洲鐵然師題字 淨信房充賢師述

現生十益説教聞書 實價 廿錢 郵税 四錢

右は説教大家を以て其名を知られたる淨信房充賢師の著述にして席を六十有餘に分ち毎適りある譬喩因縁を交へ本宗に流を汲む獲信の者は暗々裏に現生に十種の益を得ることを懇切に説教せられたる古今未曾有の珍書あり

嶋地黙雷師題字 磐井宗成師述

一讀佛敎諺話 實價 五錢 郵税 二錢

本書は佛敎三世因果の妙理を極めて淺近なる譬を擧げて如何に初心の者たりとも一讀の下に頓解し得べき様適切に辨明されたる珍者也

筑紫大徳述

眞宗御式文法話 實價 六錢 郵税 二錢

右は先年筑紫和上が報恩講の節宗祖大師の御化導に就て譬喩を交へ最も解し易く法話されし者也

眞安心法義示談 實價 八錢 郵税 二錢

本書は先年筑紫和上が示談席に於て或同行の問に應じ安心の要趣信後相續の心得に就て最も懇篤に教諭せられたる者あり尙別席は美濃多田行惠師の懇切ある示談あり

現生十種の益法話 實價 八錢 郵税 二錢

本書は我宗の流を汲む信の徒は暗々裏に現生に十種の益を得ることを師が懇切に諭されたる珍書あり

鐵槌 一名天理敎辨安 實價 六錢 郵税 二錢

近時天理敎の蔓延に付ては是が樸派の策を講ずるは目下の一大急務あり此書は一讀の下に彼が奴跡を摧破し得べき一大鐵槌あり

利井明朗師題字 受念寺多田行映師述

●聖人一流御文說教 實價廿錢 郵稅四錢

此御文は金ヶ森道西の乞ひに應じ御染筆を
らせられ殊に愚癡の我々の爲の五ヶの問答
を設け能く領解し易く御製作あらせられた
るものあり爾るに本書は斯る難有御文を讀
題として師が懇切に譬喩を交へ誰人にも領
解し易く辨述されたる者あれば以て信後相
續の助縁と亦し自幸福を得んことを望む

大行寺信曉淨心寺明傳師合著

●通佛敎百科全書 第二編 實價六十錢 郵稅十二錢

本級全一冊 實價六十錢 郵稅十二錢
假級全三冊 實價五十五錢 郵稅十錢
本書は大行寺述山海里淨心寺述百通切紙を
縮刷合せし書に於て種々の俗難に就て逐一
辨解せし書あれば演種或は説教には實に有
益ある材料あれども巻數多くして携帶に不
便あるのみあらば隨て價の不廉あるを以
て生々購讀の望を絶ち居らるゝ諸氏不勝依
て縮刷出版す

赤松蓮城師述

●四百回忌御待請御書法話 實價三錢 郵稅二錢

本書は御法會御待請心得方を辨述せし者也

利井老和上題歌 名和淵海師著

●修身佛敎德育談 實價十六錢 郵稅四錢

本書は舊鎌田今の名和淵海師が得意の達筆
を以て教育勸語の旨趣に基き撰述せられた
る平假名付繪入の而も美本の佛敎德育書に
して古今無比の珍書也一度此書を讀めば必
直し姑と嫁を和合せしめ家業を勉強せしむ
べき良書あり

小泉了齋師著 中山義樹氏序

●通佛敎修身談 實價二十錢 郵稅四錢

本書は佛敎の教義に依り我國固有の道徳を
擴張し且一家夫婦の和合より家事經濟子弟
の教育親子兄弟世間の交際生死婚禮の儀式
等に至る凡て人倫五常の大本より終末に至
る迄最も懇篤に且平易に説示せられたれば
苟も國家の隆盛一身の獨立子孫の長久を計
らんことを欲する諸君早く此書に依り實に
從一位勳一等公爵(石版摺)

●九條公佛前懸額 大形實價十錢 郵稅二錢 小形實價八錢 郵稅二錢

發行所 京都油小路 顯道書院



019283-000-8

特18-235

蓮如上人御実伝記

佐々木 量俊 / 著

M30.12

ABF-2922

